

私の魯迅遍歴

蟹澤聰史

まえがき

私が最初に魯迅に興味を持ったのはいつ頃だった全く記憶にない。しかし、学生時代に片平キャンパスに長い間通っていたこともあって、魯迅が仙台に留学した頃住んでいた家のことはなんとなく知っていた。「藤野先生」についての逸話も聞いてはいたという程度の知識しかなかった。

その後、岩波から『魯迅選集』が出版され、何となく購入して何篇か読んだ。おそらく「藤野先生」と「阿Q正伝」くらいだっただろう。しかし「藤野先生」はともかく「阿Q正伝」もその他の作品も難解で途中で投げ出してしまった。これは日本人にとっては当然のことらしく、魯迅の作品の分かり難さについて、竹内好は「一つは、中国社会の過渡期を生きたゆえに魯迅が教えた内なる矛盾という『本質的な難しさ』。もう一つは、中国現代史について日本人が『実に知らない』から」だという。それを聞いていささか安堵した。ところで、今回の読書会を機に再度読み直してみると、なるほどこういうことなのかと納得する点がいくつもある。

初めての中国訪問で

1990年代の初めころから JICA(国際協力事業)の一環として中国に出かける機会が何度かあった。最初に北京に到着し、ホテルでチェックインのためパスポートを提出したところ「おお、魯迅・藤野先生のおられた仙台、東北大学から！、それはようこそ」ということで、その後の多くの事務的なことなどがとてもスムーズに行われたことがあり、たいへん感激した。このような魯迅と仙台の名前によって好感をもたれたという経験は私だけではなく、多くの知人や友人からも聞いたことである。次第に中国の友人もたくさんでき、若い研究者を東北大学に招いたこともたびたびあった。そんな関係もあって中国では機会があるごとに魯迅に関係する場所を訪れた。1995年8月、公務の合間を縫って北京の魯迅故居を訪れた。魯迅が1924年9月から3年間住んだところだ。小雨の降るあいにくの天気のためかほかに訪れる人もなく閑散としていた。受付に女性が一人いて、どうぞご自由に、といった顔だった。窓からみると質素なベッドと机があり、机の前の壁に藤野先生の写真が飾られていた。

「藤野先生」の中にこのような文章がある。——ただ彼の写真だけは、今なお北京のわが寓居の東の壁に、机に面してかけてある。夜ごと、仕事に倦んでなまけたくなるとき、仰いで灯火のなかに、彼の黒い、痩せた、今にも抑揚のひどい口調で語り出しそうな顔を眺めやると、たちまちまた私は良心を発し、かつ勇気を加えられる。そ

こでタバコに一本火をつけ、再び「聖人君子」の連中に深く憎まれる文字を書きつづけるのである——。まさに、北京で見た魯迅故居はこの場面であったのだ。

魯迅と地質学

その後、大学を定年になって時間ができたので、産総研の『地質ニュース』に「文学の舞台・背景となった地質学」と題して何篇か投稿した。ちょうどその頃、同僚の魯迅研究家で中国文学の阿部兼也氏から「魯迅は日本に留学する前に地質学を学んだ」という話を聞き、いくつかの文献も教わった。また、大学入学以来の同僚の江幡武氏から「宮城県日中友好協会に協力してくれないか」との依頼もあって、これに参加することになった。このような事情がきっかけで魯迅にさらに興味を持つようになり「魯迅と大岡昇平」についての一文を載せた。大岡昇平と魯迅とは特につながりはないが、ページ数の関係でまとめたのである。その後、これらをまとめて『文学を旅する地質学』を古今書院から出版した。このような作業を通じて、魯迅は17歳の時南京に新設された礦路学堂に進み、鉱物学、地質学、化学、物理学、代数、幾何などを学び、魯迅は1902年に礦路学堂を卒業した後、日本に渡り弘文学院で『中国地質略論』を著したことを知った。魯迅はこの間に「ラジウムについて」などの啓蒙的な論文も発表した。1906年には一緒に日本に留学した顧琅とともに『中国鉱産志』も発表している。このように当時の魯迅は地質学をはじめとする自然科学一般に興味が強かったようである。

魯迅と仙台

魯迅について清国が指定した進路は東京帝国大学採鉱冶金学科であったが、あえて中国人のいなかった仙台医学専門学校に学ぶ道を選んだ。そのときに出逢ったのが魯迅が終生の師と仰いだ藤野巖九郎であった。

日本に留学する以前の魯迅については、『呐喊』「自序」に次のような記述がある。——「……私は、かつて四年あまりの間、しょっちゅう——ほとんど毎日、質屋と薬屋に通った。……長わすらいの父のために薬を買った。家に帰れば帰るで、また仕事山ほどあった。……Nへ行ってK学堂に入学した。この学校で私ははじめて、世には物理や、数学や、地理や、歴史や、図画や、体操などの学問があることを知った。……次第に私は、漢方医は結局意識的あるいは無意識的な騙りに過ぎない、ということをとるようになったのである。……これらの幼稚な知識のお蔭で、のちに私の学籍は、日本のある田舎町の医学専門学校に置かれることになった。私の夢はゆたかであった。……幻灯を使って微生物の形態を映してみせた。……それで余った時間をうめることもあった。時あたかも日露戦争の際なので、当然、戦争に関する画片が比較的多かった。私はこの教室の中で、いつも同級生たちの拍手と喝采とに調子を合わせなければならなかった。……この学年がおわらぬうちに、私は東京へ出てしまった。あのことがあって以来、私は、医学など少しも大切なことでない、と考えるようにな

った。

「自序」は1922年12月に公刊されたものだが、その後、1926年10月に『朝花夕拾』で「藤野先生」を載せた。この数年の間に更に仙台医専で経験した藤野先生についての思いがさらに強まったのではないかと推察する。よく知られている一節、藤野先生との思い出が記されている。……「私の講義は、筆記できますか」と彼は尋ねた。「少しできます」「持ってきて見せなさい」私は、筆記したノートを出した。彼は受け取って一、二日してから返してくれた。……私はびっくりした。そして同時に、ある種の不安と感激とに襲われた。私のノートは、はじめから終わりまで、全部朱書きで添削してあった。多くの抜けた個所が書き加えてあるばかりでなく、文法の誤りまで、一々訂正してあるのだ。……

竹内好は『魯迅選集 第二巻』の解説で「1935年、岩波文庫『魯迅選集』が出るときに、作品になにを選んだらよいか魯迅にといあわせたところ、選択は勝手にしてよろしいが『藤野先生』だけは入れてほしい、という注文があった」ことを紹介しており、これによっても魯迅の藤野先生への思い入れの大きいことがうかがわれる。

紹興および上海の魯迅故居など

魯迅は、1881年(清、光緒7年)浙江省紹興に生れた。裕福な家庭で、祖父は科挙の中でもエリートの「進士」だったが、賄賂のため投獄されたり、父親は重い病気で臥せったりして魯迅は大変苦労したらしい。そのための薬代が嵩んだこと、質屋通いをしたことなどが先述の「自序」には描かれている。1892年、紹興で最も高水準の書塾である三味書屋で勉学に励んだ頃のことである。

2009年3月、私は中国の紹興市にある魯迅記念館を訪れた。その一角には魯迅が留学した当時の写真と仙台医学専門学校の写真が飾られており、上掲の「自序」の一節が引用されていた。さらに2015年5月、宮城県日中友好協会による上海・浙江省を巡る旅に参加し、再び紹興の魯迅記念館と上海の魯迅故居を訪れた。上海は魯迅の生涯の最後を過ごした場所で、魯迅博物館や魯迅と親交のあった内山完造による内山書店も魯迅故居の近くにある。魯迅故居では1933年4月から1936年10月19日の亡くなる日までをここで過ごしたという。仙台でも毎年10月19日の命日には魯迅碑前祭が行なわれている。魯迅故居のすぐ近くに「故郷」の最後の一文「希望とは……」を掲げた額があった。

現代に生きる魯迅と希望観

若いころは魯迅の文章はとても難解で途中で投げ出してしまったが、年を経た今読み直してみると、なるほどそうだったのかと納得することも多いが、まだまだ完全に理解するには至っていない。

「故郷」は、別れてから20年余りになる主人公「私」が家をたたんで別の土地に

移るために故郷に帰った物語で、子供の頃からの古い友達^{カントウ}閩土と再会したが、すでに二人の間には悲しむべき厚い壁が築かれてしまっていた。彼の現在の窮状を知り、旧い自分の家からも遠ざかり、故郷の山水も次第に自分から離れてゆくが、少しも名残を惜しむ気になれない。しかし、彼の子供と私の甥っ子との間にはかつての私と閩土との間と同じような仲の良い気持ちを抱いていることであり、今のような隔たりは知らせたくない。彼らは、新しい生活をもたなければならない。私たちのかつて経験したことのない新しい生活を、それが魯迅の希望でもあると思う。

そして文末の「希望」という言葉で締めくくられる。——思うに、希望とは、もともとあるものだともいえぬし、ないものだともいえない。それは地上の道のようなものである。もともと地上には、道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。——。

ところでこの『呐喊』『故郷』のなかで印象に残ったのは、閩土が教えてくれた鳥の取り方である。——雪が降ると、雪をかいて、すこし空地进行をこしらえるんだ。それから、大きな籠を持ってきて、短い棒でつかえ棒をかけて、屑粉を撒まくんだ。そうすると、小鳥が来て食うから、そのとき遠くの方から棒にゆわえてある縄を引っぱるんだ。そうすると、みんな籠のなかにはいってしまうんだ。——というのである。これは、私も小さい頃に信州の田舎の庭でやったことで、「故郷」を読むと私の幼い頃の思い出がつぎつぎと沸きあがってきた。

「阿Q正伝」はやや長い小説だが、家もない素性もはっきりしない阿Qは地蔵堂のなかに住んでいた。尼さんに惚れ込んだり、趙家の仕事をしたりしていた。革命に加わったりで、無知な阿Qは何もわからず、自分の名前すら書けないので紙に○を書いてしまったために無実の罪に問われて最後は銃殺されてしまう。当時の庶民を代弁するかのような阿Qの生涯の最後のところは「藤野先生」で描かれた「幻灯事件」のときの民衆のそれを髣髴させるような気がした。この小説も「故郷」も、当時の中国の状況が分からないと理解ができないことをよく知ったのである。

もう一つ、魯迅に「希望」という短い作品がある。1925年の作なので、私よりはるかに若いけれども、ずいぶんと老成した感じのする、しかしいへん難解な作品である。だが、これは魯迅の魂を吐露した哲学的な文章だと私には感じられる。ハンガリーの詩人ペトフィの詩を引きながら「絶望の虚妄なることは、まさに希望と相同じい」という。このことは「希望が嘘偽りであるということならば、絶望もまさにその通りである」だから「希望を捨てることはない。まず一步を踏み出すことが大事なのだ」と言いたいのだと私は解釈したのだが、どうであろうか。

おわりに

本文はこの度の「魯迅読書会」に向けて、私の頭の整理のために想いのままを綴ったものである。まだまだ魯迅の神髄には到達できない私ではあるが、今から百年も前に彼の言葉には、膨大な SNS の洪水によって世界の流れが動かされてしまっていること、そしてますます複雑化して世界中紛争の絶えない現代の私たちの生活にこそ重要な指針があると教えられた。そして、絶望ではなく希望への第一歩を踏み出すことが大事であるということ。

文中で引用した魯迅の文章はいずれも竹内好訳(1964)から採った。

引用・ならびに参考文献

阿部兼也(2000)『魯迅の仙台時代』，東北大学出版会.

蟹澤聰史(2004) 文学作品の舞台・背景となった地質学 5 魯迅，大岡昇平の作品と地質学，地質ニュース，No.603, 46-57.

蟹澤聰史(2007)『文学を旅する地質学』，古今書院，

魯迅(1964)『魯迅選集 第一巻』，岩波書店，

魯迅(1964)『魯迅選集 第二巻』，岩波書店

魯迅生誕 110 周年仙台記念祭実行委員会編(1991)『魯迅と日本』，魯迅生誕 110 周年仙台記念祭実行委員会.

魯迅・東北大学留学百周年史編集委員会編(2004)『東北大学留学百周年 魯迅と仙台』，東北大学出版会.

2026 年 6 月 10 日 記



写真1. 北京の魯迅故居



写真2. 藤野先生と魯迅の像 東北大学附属図書



写真3. 紹興の魯迅記念館にて
仙台時代の魯迅



写真4. 魯迅が通った紹興の三味書屋



写真5. 上海の魯迅故居



写真6. 上海魯迅故居付近にある
「希望」の額

写真はいずれも蟹澤撮影

中国人の視点から見た魯迅の『藤野先生』執筆の歴史的背景

劉 煥豪

中国人の視点から見ると、魯迅が『藤野先生』を書いた歴史的背景は、単なる生徒関係の回想としてだけではなく、清末における民族的危機の深まり、中国知識人による救国の道の模索、そして魯迅自身の思想的転換の過程の中で理解する必要がある。

魯迅は 1881 年、浙江省紹興に生まれた。彼が成長した時代は、中国が伝統社会から近代社会へと移行しようとしながらも、度重なる失敗を経験していた時期であった。19 世紀後半、清政府は洋務運動（ようむうんどう）を通じて西洋の軍事技術や科学技術を学ぼうとしたが、その改革は主に技術や器物のレベルにとどまり、政治制度や社会思想の根本的な変革には至らなかった。一方、日本は明治維新以後、近代国家としての発展を進め、国力を急速に高めていった。

1894 年、日清戦争が勃発した。この戦争は清政府の敗北と北洋艦隊の壊滅に終わり、洋務運動の失敗を象徴する出来事となった。1895 年、清政府は日本と不平等条約である下関条約を結ばざるを得なかった。この条約により、中国は朝鮮の独立を認め、台湾および澎湖諸島（ほうこしょうとう）を割譲し、巨額の賠償金を支払うことになった。また、さらなる通商港の開放や日本による中国での工場設立も認められた。下関条約は日本に大きな利益をもたらした

けでなく、日本の対外拡張の野心をさらに刺激した。一方、中国にとっては、半植民地化の程度が大きく深まる契機となった。

日清戦争後、西洋列強は中国分割の動きを強め、中国の民族的危機はさらに深刻化した。このような状況の中で、中国の知識人たちは、西洋や日本から学び、国家を救う道を探る必要性を強く意識するようになった。清政府も欧米だけでなく日本へ多くの留学生を派遣するようになり、魯迅の日本留学もこの時代の流れの中に位置づけられる。

1898 年、魯迅は南京の江南水師学堂に入学し、翌年には江南陸師学堂附設の鉱務鐵路学堂に転入した。この時期、魯迅は鉱山や実業に関する知識を学ぶとともに、多くの新しい書物に触れ、西洋の近代的な思想や科学知識を吸収した。こうした学習経験は、後の魯迅の思想形成に一定の影響を与えたと考えられる。1902 年、魯迅は同校を卒業し、官費留学生として日本へ渡った。

その一方で、中国国内の危機はさらに深まっていた。1899 年前後には義和団（ぎわだん）運動が起こった。義和団運動は、列強の侵略とキリスト教勢力の拡大に反発して起こった民衆の反帝国主義的な抵抗運動であり、一方で排外的な側面も持っていた。1900 年には八カ国連合軍が中国に侵攻した。北京は占領され、清政府は列強との講和を求めざるを得なくなった。1901 年、清政府は列強と辛丑条約を結び、中国は巨額の賠償金を負担し、外国軍隊の駐留を認めることになった。この条約によって、清政府は列強に大きく従属する存在となり、中国人民の民族的危機感はいっそう強まった。また、ロシアは八国連

合軍（はっこくれんごうぐん）への参加に加え、中国東北部、すなわち満洲への進出を強め、これが後の日露戦争の背景の一つとなった。

1902 年、魯迅は日本に留学し、まず東京の弘文学院で学んだ。1904 年、東京での予備教育を終えた後、魯迅はそれまでの鉱務や実業を通じた救国の道をそのまま進むのではなく、仙台医学専門学校に入学し、医学を学ぶことを選んだ。魯迅が医学を志した理由は、単なる個人的な職業選択ではなかった。彼は、当時の中国の伝統医学では、父の病気を十分に治すことができなかったという経験から、近代医学の必要性を強く感じていた。また、近代医学は日本の近代化にも大きな役割を果たしたと考え、中国人の身体を強くし、国家に貢献したいという思いを持っていた。

さらに、魯迅が仙台へ向かった背景には、東京の一部の清国留学生の贅沢三昧の生活態度に対する失望もあった。魯迅は、東京で遊興にふけり、真剣に学ぼうとしない留学生たちの姿を好ましく思わず、そのような環境から離れて、仙台で静かに勉強しようとした。そのため、彼は東京を離れ、当時まだ中国人留学生のいなかった仙台へ向かったのである。

仙台で魯迅は、藤野巖九郎先生と出会った。藤野先生は解剖学を担当しており、魯迅の学習に対して非常に丁寧で誠実な指導を行った。彼は魯迅の講義ノートを細かく添削し、授業内容を理解できているかどうかを気にかけた。藤野先生は、魯迅が弱国から来た留学生であることを理由に差別することなく、一人の学生として真摯に接した。この国籍を越えた尊重と温かい配慮こそが、後に魯迅が『藤野先生』を書く際の重要な感情的基盤となった。

しかし、仙台での生活の中で、魯迅は同時に強い民族的刺激も受けた。1904年、日露戦争が勃発した。日本とロシアは、中国東北部と朝鮮における権益をめぐって争い、中国の土地の上で戦争を行った。中国は戦場でありながら、自国の運命を自ら決定する力を持っていなかった。この事実は、当時の中国がいかに弱い立場に置かれていたかを示している。

授業中、魯迅は日露戦争に関する映画を見た。その中には、同胞が処刑される場面を、中国人たちが無関心に見物けんぶつし、拍手や歓声を上げている様子が映されていた。この出来事は、魯迅に大きな衝撃を与えた。彼は、身体を治療するだけでは中国を本当に救うことはできないと気づいた。たとえ身体が健康であっても、精神が麻痺していれば、人々は依然として侮辱され、支配される存在にとどまってしまう。したがって、魯迅は、中国人にとってより重要なのは肉体の治療ではなく、精神の覚醒であると考えようになった。

この経験をきっかけに、魯迅は医学をやめ、文学によって国民精神を改造する道へと進むことを決意した。1906年、魯迅は仙台を離れて東京に戻り、本格的に文芸活動へと向かっていった。彼にとって、文学は単なる芸術表現ではなく、中国人の精神を目覚めさせ、社会を変革するための手段であった。

『藤野先生』は、魯迅が仙台にいた当時すぐにした作品ではなく、長い年月を経てから、その経験を回想して書かれた作品である。1926年、魯迅は厦門で『旧事重提』の一連の文章を書き、その中の一篇として『藤野先生』を完成させた。後にこの作品は散文集『朝花夕拾』に収められた。

したがって、『藤野先生』の執筆背景には二つの意味がある。一つは、魯迅が青年時代に日本へ留学し、仙台で藤野先生と出会い、やがて医学から文学へと進路を変えた個人的経験である。もう一つは、清末から民国期にかけての民族的危機の中で、中国人知識人がどのように国家の再生を模索したのかという歴史的問題である。中国人の視点から見ると、『藤野先生』は、藤野先生の誠実な人柄と温かい指導を描いた作品であると同時に、弱国の留学生としての屈辱感、民族的危機感、そして魯迅が「医学による救国」から「文学による精神の覚醒」へと転じていく思想的過程を示す作品でもある。

魯迅年表

年	年齢	主な出来事
1881年	0歳	浙江省紹興に生まれる。本名は周樹人。
1898年	17歳	南京の江南水師学堂に入学する。
1899年	18歳	江南陸師学堂附設の鉱務鐵路学堂に転入し、鉱山や実業に関する知識を学ぶ。
1902年	21歳	官費留学生として日本へ渡り、東京の弘文学院で学ぶ。
1904	23	仙台医学専門学校に入学し、医学を学び始める。ここで藤野厳九

年	年 齢	主な出来事
年	歳	郎先生と出会う。
1904 年	23 歳	日露戦争が勃発する。日本とロシアは中国東北部と朝鮮の權益をめぐって争う。
1906 年	25 歳	仙台医学専門学校を離れ、東京に戻る。幻灯片事件などをきっかけに、医学をやめて文学の道へ進むことを決意する。
1909 年	28 歳	日本での留学生生活を終え、中国へ帰国する。
1918 年	37 歳	『狂人日記』を発表する。これは中国近代文学を代表する作品の一つとされる。
1921 年	40 歳	『阿 Q 正伝』の連載を始める。中国社会と国民性を鋭く批判した作品である。
1926 年	45 歳	厦門で『藤野先生』を書く。後に散文集『朝花夕拾』に収められる。
1936 年	55 歳	上海で亡くなる。